# 幼児の日常場面に見られる自己調整機能の発達
## —エピソードからの考察—

鈴　木　亜由美

## 問　題

幼児は日常生活での仲間との相互作用や集団生活において，自己の欲求や衝動を調整しなければならない状況に数多く出会う。Kopp (1982) によれば，子どもは2歳ごろになると表象と記憶の発達によって，大人からの指示を内面に保持して，それを大人による監視がないところでも適用するようになるという。さらに3歳ごろになると，様々な規範が内面化され，初めて出会う場面にも柔軟にそれらを適用することができるようになるという。つまり，自己調整の一つの到達点に至るのは3歳ごろであるとされている。

その後，3歳から6歳にかけて，言語を自己調整のための手段として使用することが可能になること（Luria,1961 ; Luria,1969)，また欲求対象から注意をそらすといった様々な自己調整方略についての知識が獲得されること（Mischel & Mischel, 1983）が明らかにされており，それに伴う自己調整の発達が示されてきた。しかしながら，これらの研究は，統制された実験場面で行われており，幼児の日常的な自己調整機能の全体像を明らかにするものではない。そこで幼児の日常生活において，自己調整するべき状況に出会ったときに，子どもがどのようにそのような状況に対処するかを明らかにし，またそれらの自己調整的行動について幼児期の各年齢における発達的特徴を記述することもまた必要であると考えられる。また，多くの子どもが幼児期になって初めて幼稚園や保育所に入園する。そこでは，それまでの家庭内での生活とは異なる，集団の中で園独自の慣習や規範になじんでいく必要がある。

柏木（1988）は，日常場面における幼児の自己調整機能を，自己抑制的側面と自己主張的側面という2つの側面からとらえることを提唱し，「集団場面で自分の欲求や行動を抑制，制止しなければならないとき，それを抑制する」という自己抑制的側面だけでなく，「自分の欲求や意志を明確に持ち，これを他人や集団の前で表現し主張する」という自己主張的側面もまた重要な側面であると考えた。柏木（1988）は，3歳～6歳の子どもについて，幼稚園の教師に対する質問紙調査を行い，各年齢で自己抑制行動と自己主張行動がどのぐらい現れるかを検討した。その結果，自己抑制に関しては3歳～6歳の間に一貫してなだらかな増加が見られたのに対して，自己主張に関しては3歳～4歳までに大きな伸びが見られるものの，その後4歳半ごろを境に伸びが見られなくなることがわかった。

鈴木（2005a）は，自己抑制状況（魅力的なおもちゃに対する誘惑抵抗状況）と自己主張状況（「後でおもちゃで遊ぼうね」という約束が守られない状況）を実験的に設定し，そこでの実際の幼児の行動と，同様の状況を仮想的な葛藤場面として提示した際の反応との関連の発達的変化を

調べた。その結果，自己抑制状況に関しては仮想，実験場面ともに年齢とともに状況に一致した自己抑制状況を示す人数が多くなるのに対して，自己主張状況では仮想場面で年齢とともに状況に一致した自己主張行動を選択する人数が多くなるものの実験場面で実際に自己主張をする子どもには年齢差が見られず，年長児（5〜6歳）になると「自己主張してもよい状況でも実際には自己主張を控える」という現象が現れることがわかった。その後の研究（鈴木，2005b）では，実験者に協力する「お手伝い状況」として，実験者に頼まれて台紙にシールを貼るという「お手伝い」をしているときに，シールが足りなくなるという状況を設定した。その結果，「足りない」ということを主張する行動が多く現れることがわかり，年長になるにつれて状況や他者との関係性の中で自己抑制と自己主張を使い分ける発達像が明らかになってきた。

そこで本研究では，これらの実験的研究（鈴木2005a，鈴木2005b）で見られた幼児期（3〜6歳）における自己抑制行動と自己主張行動の発達的変化を，日常場面の中で現れる子どもの行動を記述することによって，さらに詳細に検討することを目的とする。なお，年少児，年中児，年長児の各年齢の子どもを同時に観察し，これらの各年齢での自己調整機能の発達的変化を縦断的にとらえるために，これらの3つの年齢の子どもが同一クラス内に在籍する縦割り保育に取り組む幼稚園で観察を行った。

## 方　法

### 対象児

京都市内の私立幼稚園の1クラス（R組）に2003年度〜2004年度に所属した園児全員を対象とした。この幼稚園は「縦割り保育」の形式をとっており，1クラスが年少児，年中児，年長児からなり，2003年度の年少児と年中児は，持ち上がりで次年度も同じクラスに在籍していた。人数は，2003年度が27名（うち途中転出が1名，転入が1名），2004年度が27名（うち途中転出が3名，転入が2名）であった（表1参照）。クラスの担任は，2003年度はJ先生（教職経験5年），2004年度はK先生（教職経験10年）であり，いずれも女性教諭であった。

表1．対象児の内訳

| 2003年度 | | 2004年度 | |
|---|---|---|---|
| 年長児 | 男5名（1名），女6名 | | |
| 年中児 | 男4名（1名），女5名 | 年長児 | 男3名，女5名 |
| 年少児 | 男4名，女3名 | 年中児 | 男6名（2名），女5名（1名） |
| | | 年少児 | 男4名（1名），女4名（1名） |

注．（　　）内は年度途中での転入，転出児の人数。

### 手続き

筆者自身が観察者となり，学期中，毎週木曜日の午前9時から11時ごろまでクラスに入り，園児の行動を観察した。記録はフィールドノートにメモを取り，後にエピソードを詳細に記録した。観察の対象となったのは，「おしごと」の時間帯（午前9時から10時15分ごろまで）と，その後の

朝のお集まりの時間帯（10時15分から10時45分ごろ）が中心であった。

「おしごと」の時間帯とは，モンテッソーリ・メソッドにもとづき，構造化された教具で活動する時間帯であった。内容は，縫い取り，パズル，塗り絵，切り抜きなど多岐に渡り，1つのテーブルを4人程度で囲むように座り，各自が自分の好きな「おしごと」を選び，基本的に1人1人が自分の作業に集中して取りくむべきであった。また，数字ならべやかるた取りなど，作業によっては床にカーペットを敷いた上で，複数の子どもで取り組むことが認められていた。

朝のお集まりでは，この園はカトリック系の幼稚園であるため，まずピアノの音を聞きながら輪になって座り，朝のお祈りと挨拶を行ったあと，出席をとるという流れで行われていた。年齢ごとに日替わりの「お当番」が決められており，お祈りや出席をとる際の名前呼びを行った。日によって，お集まりの前後に歌や絵本の読み聞かせが加わることもあった。

## 結果と考察

### エピソードの抽出方法

2年間のフィールドノートに記述された計291のエピソードから，子どもが自己調整するべきであると考えられる状況に関するエピソードを抽出した。具体的には，子ども自身に何らかの欲求が生じているにもかかわらず，それを抑えなければならない状況（自己抑制状況），あるいは子ども自身に何らかの欲求が生じているにもかかわらず，それが不当に阻害されているため，欲求を適切な方法で表出するべき状況（自己主張状況）であった。

抽出されたエピソードを，調整の行為者の年齢別に分類すると年少児16，年中児14，年長児13の合計43であった。年齢ごとに，各エピソードの内容，つまり自己抑制状況か自己主張状況かと，その行為が成功したか失敗したかにもとづいて4つのカテゴリーに分類し，表2に示した。なお年長児の自己抑制の失敗，年少児の自己主張の失敗については，エピソードが集められなかった。

表2. 年齢別のエピソードの内容

| | 自己抑制状況 | | 自己主張状況 | |
|---|---|---|---|---|
| | 成功 | 失敗 | 成功 | 失敗 |
| 年長児 | 2 | 0 | 7 | 4 |
| 年中児 | 2 | 3 | 5 | 4 |
| 年少児 | 2 | 8 | 6 | 0 |

### 年少児のエピソード

表2から，年少児では自己抑制状況の成功と失敗，自己主張状況の成功のエピソードが得られたことがわかる。これらの3つのカテゴリーの中から1つずつのエピソードを取り上げ，以下に紹介する。各エピソードの末尾に観察年月日を記した。

エピソード1　年少児の自己抑制の失敗例

お集まりの前に，クラス全員で手遊びをしているときに，K (年少男児)が，一人輪を飛び出していく。観察者が後を追おうとすると，Kは「やだー」と走って逃げるが，すぐに部屋に戻ってきて，「うわー」と叫ぶ。Kが再びみんなの輪の中に入っていくと，J先生は子どもたちに向かって，「(Kちゃんに）一緒にすわろうって言ってあげて」と言う。E（年中女児）が，Kの手をひいて「一緒にすわろう」と声をかけるが，KはEの方を見ず，違う子の方へ歩いていく。先生はKに，「Mちゃんの横にすわりたいの？『入れて』って言いや(言いなさい)」というが，Kは無言で入っていく。すると，EがK代わりに「入れて」といってあげる。J先生は，Kに「(Eちゃんに)『ありがとう』って言い（なさい)」というが，Kは再び無言のままである。(03.10.16)

Kはこの日，登園時から機嫌が悪く，みんなで手遊びをしているときに，急に「したくない」と言い出し，部屋を飛び出していった。さらに，J先生や他の子どもたちの気を引こうとしたのか，すぐに部屋に戻ってきて大声で叫んだ。Kは普段から気が向かないと集団活動に参加しなかったり，部屋から出て行ったりすることが度々あったため，J先生はそんなKの行動を特に注意をすることなく，Kが集団に戻れるように他の子どもたちに協力を求めた。すると，Kのことをいつも気にかけて世話をしてくれている年中女児のEがKを誘いに来てくれるが，Kはそれに応えることなく，自分の気の向くままに別の場所に行く。さらに，J先生の「『入れて』って言いなさい」「『ありがとう』って言いなさい」という働きかけにも無反応であった。

エピソード2　年少児の自己抑制の成功例

「おしごと」の後に園庭で体操をするため，J先生から「お外に出て，テラスで待つように」と指示される。Y（年少男児）は，「一緒にお外へ行こう」と観察者を誘う。観察者が「お靴が1階にあるから，取ってきてから後で行くね。お外で待っていて」と声をかけて外に出ると，Uは砂遊びの道具を手にして待っている。近くにいたCとR（ともに年中女児）は，Yを見て，「お砂遊びしたらあかんのに」と言う。クラスの他の子どもたちはJ先生に言われたとおり，テラスにならんでいる。観察者が，「みんなならんでいるよ。Yくんもお片づけをしてならびに行こう」と言うが，Yは，同じ年少児のEもお砂遊びの道具を手にしているのを見て，「でもEくんもしたはる…」と言いながらも，遊び道具を片付けにいく。(03.10.23)

通常は「おしごと」と昼食の間の時間帯は自由遊びの時間であるが，この日は例外的に他のクラスと合同で体操が行われた。Yは，「お外に出る」というJ先生のことばを聞いて，「お外で遊べる」と解釈したらしく，遊ぶつもりで一杯であった。しかしながら，J先生は「テラスで待つように」と指示しており，他の子どもたちも大半はすでにテラスにならんでいたため，ここではYにとって遊びたいという欲求を自己抑制するべきであると考えられる。Yは，他にも遊んでいる子がいることを指摘するなど心底納得できているわけではないようだったが，他の子どもたちの非難めいたことばや観察者の促しによって，遊びたい気持ちをがまんして遊び道具を片づけに行くことができた。

エピソード3　年少児の自己主張の成功例

M(年少女児)が棚に置かれた「おしごと」を選んでいるところに，N(年中女児)が歩いてきて，Mをぎゅっと抱きあげようとする。MはNに「やめて！」と言う。Nはしきりに Mを抱きしめたり，ほおをくっつけたりするが，そのたびにMは「いやや！」「Nちゃん，やめて」と言う。(04.05.06)

Nは年下のMがかわいくて仕方がない様子で，いろいろと構おうとするが，Mは体にまとわりつかれるのが不快なようで，Nの自分に対する好意にはお構いなしに，「いや」「やめて」を繰り返し，強く拒絶していた。

**年少児の自己調整的行動の発達的特徴**

年少児では，エピソード1に見られたKのように，その時々の気分や感情がおもむくままにふるまうため，仲間との間でトラブルが生じたり，集団行動に入れないことがある。またこの時期には，日常のルーティンにそった活動の中では，内的規範を形成し，ある程度それに従って行動することができるが，エピソード2に見られるように，ルーティンから外れた例外的な状況に対しては，子ども自身で「○○したいけれどもしてはいけない状況である」という判断をすることが難しい。よって，他者からの外的な指示や促しによってはじめて欲求を抑制することが可能になることもある。

また，エピソード3の例に見られるように，この時期の自己主張は「○○したい」「○○したくない」という単純な形での表出が多く，相手がなぜそのような行動をとるのかを考慮したり，自分がそうされるとなぜ嫌なのかという理由を言ったりすることは少ない。また，年少児の自己主張に関しては失敗例のエピソードが抽出されなかったことからも，相手との関係を配慮して自己主張を控える，という姿はこの時期にはまだあまり見られないと考えられる。

**年中児のエピソード**

表2より，年中児では自己抑制の成功，失敗，自己主張の成功，失敗と4つのカテゴリーすべてのエピソードが見られた。よって，4つのカテゴリーから１つずつのエピソードを取り上げる。

エピソード4　年中児の自己抑制の成功例

年中男児のAとKが2人でならんで座り，Aは星座の本，Kは魚の図鑑をそれぞれ見ている。Aが見ていた絵本に星座早見表がついていて，Aはそれをぐるぐる回して遊び始める。それを見たKはAに，「(本を) 交換しよ」というが，Aは「(まだ) 早い！」と言う。しばらくして，Kは再び，「交換しよ。Aくん，ニモ（アニメの魚のキャラクター）好きやろ？」と言うが，Aはそれには答えない。また少しすると，AはKに，「交換してあげる」と言う。Kは「ありがとう」といって本を受け取り，星座早見表をぐるぐる回しはじめる。少し遊ぶと，Kは自分からAに，「交換せんでもいいか？」と声をかけ，Aも「交換しよ」と応じ，その後も交代しながら本を見ている。(04.06.03)

このエピソードで登場するKはエピソード1の自己抑制の失敗例でも登場した子どもである。Kは年少のときには，仲間関係の中でもトラブルが多い子どもであったが，年中になると年中の初めから転入してきたAと仲良くなり，Aとの遊びの中では自分の要求を抑制したり相手に譲ったりできるようになってきた。

このエピソードでは，Kの「本を交換しよう」という提案は，一旦Aに断られるものの，Kが感情的にならず，じっとがまんしていたことで，Aの方にも「交換してあげよう」という気持ちが芽生え，自発的に交換に応じた。その後も定期的に本を交換しながら，仲良く過ごすことができた。

エピソード5　年中児の自己抑制の失敗例

| |
|---|
| お集まりの後に，クラス全員で床に描かれた白い円の線上を歩く練習をする。年少児から順に行うが，中にはうまくできず，ふらついて倒れる子もいる。それを見た，K（年中男児）とY（年中男児）は，「あははは」と笑う。年長児は口々に「笑ったらあかん」「(年少児が）かわいそうや」と言い，K先生からも「他の子が失敗しても笑わないように」と注意を受ける。次に再び年少児がふらついて手をつき，誰かが笑うのを見て，今度は先ほど注意されたKとYが「笑ったらダメ！」と言う。(05.01.27) |

このエピソードにもエピソード1の自己抑制の失敗例で登場したKが登場する。Kは年中児になって，エピソード4でも見られたように，仲間関係の中では自分の要求を抑えたり，相手に譲ったりする局面が増えてきたものの，集団場面ではまだ自己抑制が難しい場面が度々見られた。

このエピソードでは，最初KとYは，他の子が転ぶのを笑ってしまうが，一生懸命やっている年少児の気持ちを考えれば，自己抑制するべき状況である。K先生や年長児から注意され，KやY自身の内面にも「笑ってはいけない」という気持ちが生じたらしく，その直後に他の子どもが笑ってしまったときには「ダメ！」と自ら注意することで，その子に対してだけではなく自分自身に対しても笑うのを禁じていたかのようであった。

エピソード6　年中児の自己主張の成功例

| |
|---|
| 同じテーブルで「おしごと」をしていた，M，F（ともに年少女児），Y（年中男児），A（年中女児），がおしゃべりをしている。そこへ通りかかったH（年少男児）が，「うるさい！」と言う。それに対して，A「うるさいって言ったらあかんで」Y「年上にな，年上に言ったらあかんで」と言い返す (05.01.20) |

「おしごと」の時間には，それぞれが自分の作業に静かに取り組むのが原則であったが，周りに迷惑をかけない程度に近くに座っている友だちと話すのは比較的許容されていた。しかし，Hにとっては話し声が大きく感じたようで，「うるさい！」と強い口調で注意をした。普段から，ある子どもが他児にきついことばや口調で注意をすることが原因でいざこざが起こりやすいため，先生が「お友だちに注意をするときには優しく言うように」と指導していたこともあり，Aは「うるさいと言ってはいけない」という規範を持ち出して反論した。さらに，Yは年少児のHに

注意をされたことに気を悪くしたようで，「年上に注意をしてはいけない」と自ら規範を作って反論していた。

エピソード7　年中児の自己主張の失敗例

| |
|---|
| この日のお集まりでは，各自で自分の座る椅子を持ってくることになっていたが，Y (年中男児)が持ってきた椅子に，M (年少男児)が座ってしまう。それを見たYは一人輪をはずれて，部屋の隅で体育すわりをしている。K先生がMに席を移るように言い，Yの椅子が空いた後も，お集まりが始まっているにもかかわらず，椅子に座ろうとしない。(04.05.06) |

この日はそれぞれが自分の椅子を持って来て，椅子に座ってお集まりをすることになっていたが，入園して間もないMは，そのことを理解しておらず，その場に置かれている椅子にそのまま座ってしまったようである。Yにとっては，自分が持ってきたことを主張するべき状況であったが，そうすることができず，すねて輪をはずれてしまった。このエピソードは「自己主張の失敗」に分類したが，問題が解決した後もYの機嫌がなおらず，お集まりに入れなかったことから，自己抑制の失敗例であるとも言える。

**年中児の自己調整的行動の発達的特徴**

この時期には，「○○してはいけない，○○しなければいけない」という規範が強く内面化され，様々な状況で規範を意識した言動が見られる。例えば，エピソード5に見られるように，他者の失敗を笑うという行為を先生や年長児に強く咎められたKとYは，この状況では「笑ってはいけない」ということを強く意識し，その後は他の子どもの行動を禁止する立場にまわっている。

また，自己主張状況でも自分の権利や要求を他者に主張したり，他者を拒否したりするときに，「○○してはいけない」「○○しなければいけない」という表現が多く聞かれる。例えば，エピソード6では，自分たちのおしゃべりをHにとがめられたAは，「うるさいと言ってはいけない」と別の規範を持ち出してHに反論している。その一方で，エピソード7に見られるように，本来自分の権利を主張してもよいはずの状況でうまく主張できず，すねたり泣いたりしてしまい，問題が解決した後もネガティブな情動の表出を抑制できずにいつまでも引きずってしまっているような行動も年中児によく見られる姿である。

またこの時期には，相手の立場や自分との関係性に応じて，自己主張を控えるという姿が見られ始める。エピソード6の「年上に言ったらあかんで」というYの発言は，まさに相手との関係性を意識した発言であると考えられる。さらに，エピソード7の自己主張の失敗例も，Yは相手が入園間もない年少児であったという事情を配慮して自己主張を控えたものの，自己の感情の調整がうまくできず，すねて泣いてしまうという結果になったとも解釈できる。

**年長児のエピソード**

表2より，年長児では自己抑制の成功と，自己主張の成功，失敗の3つのカテゴリーのエピソードが見られた。よって，これらの3つのカテゴリーから1つずつのエピソードを取り上げる。

エピソード8　年長児の自己抑制の成功例

この日は2学期の最終日で午前保育であり，おしごとの時間が終わるとお帰りのお集まりとなった。年長児たちは，「ピアニカを家に持って帰る」と口々に言っている。年長児たちがお集まりにピアニカを持ってならんでいると，K先生が来て，「ピアニカはもって帰らないことになりました。」と言う。年長児は，「えーっ」，「やだ」と言う。R（年長女児）が，「なんで？」と聞くと，K先生は，「(他のクラスも）みんな持って帰らないんだって。みんなそろえるんだって」と言う。それを聞いた年長児たちは，ピアニカを置きにいく。(04.12.16)

年長児たちは家にピアニカを持って帰って練習できるものと思って喜んでいたが，K先生の突然のことばに最初反発していた。しかし，K先生から園全体のきまりとして持って帰ってはいけない，ということを聞くと，完全に納得したわけではないながらも，それ以上の反論をする子どもはおらず，全員がピアニカを片づけに行っていた。

エピソード9　年長児の自己主張の成功例

R (年長女児)とI (年長男児)はならんで座り，ビーズで動物の形を作るおしごとをしている。そこへM（年少女児）がビーズに興味を示し，RとIに近寄っていく。MはRとIの様子をじっと見つめたり，ビーズを手にとったりする。Rは「Mちゃん，やめて。じゃましないで」と言う。Mがそれでもビーズをさわり続けるのを見て，Rは「Mちゃんそっちに行っててちょうだい。そっちでセーラームーン（ごっこ）してて」と言いながら手でMの体を押してその場をどかせる。Mが離れていくと，Rは小さな声で「よかった…」と言う。(04.05.13)

ビーズのおしごとは難しいため，原則として年中児からできるおしごとであると言われていたが，入園間もないMはビーズに興味深々な様子であった。しかしながら，作りかけのビーズがワイヤーからはずれてしまったりすると，せっかく取り組んでいたのが台無しになってしまうため，RとIにとって自己主張するべき状況であると考えられる。実際に，普段は率先して年少児に優しくし，いろいろと面倒を見ているRも，必死になって声をかけてMをその場から離れさせようとしていた。

エピソード10　年長児の自己主張の失敗例

E (年長女児)が，縫い取りをしていると，そこへ来たR (年長女児)がEの縫い取りを見て，「やってあげる」と手に取る。Eは，「自分でやる」と言うが，Rに「間違ってる」と言われると，縫い取りをRに手渡し，笑顔を浮かべる。(04.10.21)

このエピソードでは，エピソード1で年少児Kの面倒をよく見ていたEと，エピソード9で登場したクラスの中で特にしっかりしていて影響力のあるRが登場する。Eが縫い取りに一生懸命取り組んでいたところへ，突然Rがやって来て，Eのおしごとを Rがとってしまった形になったため，Eにとっては自己主張するべき状況であると考えられる。Eは，一度「自分でやる」と自己主張したものの，Rが「間違っているから直してあげるんだ」という理由を言うと，それ以上言

い返すことができなくなってしまい，不本意ながらもRにまかせていた。また，Eはその場が一瞬険悪な雰囲気になったのを取り繕うかのように，ニヤッとあいまいな笑顔を見せていた。

**年長児の自己調整的行動の発達的特徴**

年長児では，表2に見られたように，年少児と年中児に比べて自己抑制のエピソードが少ない。これは年長児になると，自己抑制できるのはある意味当然であり，年長児同士のかかわりの中では自己抑制が明確化されることはなくなるからであると考えられる。

エピソード8では，「ピアニカを家に持って帰りたい」という強い欲求がK先生の一言によって禁じられてしまう状況である。このとき，年長児たちは「嫌だ」と自己主張するだけではなく，「なんで？」とK先生の言い分を聞こうとしている。さらに，「園全体の決まりである」という説明に対して，「決まりならば仕方がない」といった様子で素直に従っている。ここからも規範を重視し，それに従って行動することを好む年長児の姿がうかがえる。

その一方で，エピソード9では，Rは自分の取り組んでいるおしごとを年少児に妨げられる可能性がある事態に対して，「そっちに行って！」と強く自己主張している。このように集中して取り組んでいることを妨げられると怒ったり強く主張したりする姿が年長児にはよく見られる。自分の「おしごと」をきちんとやりたいという姿勢や時間をかけて取り組んできたことの価値への気づきというのも年長児に特徴的であると考えられる。これは，自分に与えられた課題をやり遂げるという長期的な規範に従った行動とも考えることができる。

さらに，エピソード10は，自己主張の失敗のカテゴリーに分類したが，Eがこの状況で，「自分ひとりでやりたい」という欲求を追及するのではなく，「きちんと正しい縫い取りをするべきであるし，自分自身もそうしたい」という気持ちによって，他の子どもの手伝いを受け入れることができた，と言う意味では自己抑制の成功例とも言える。さらに，最初に自分が強く言い返したことによって，気まずくなった雰囲気をやわらげるために意識的に笑顔を浮かべる，という行動をとっている。このことからもEは自分のその場の欲求を追及するよりも，仲間との関係性を保つというより長期的な目標を重視していると考えることができる。

また，これらの自己主張のエピソードは，他者との関係性に応じて自己主張を控えたり表現を変えたりする姿としても解釈できる。つまり，エピソード9は年少児に対する自己主張状況であったため，Rはただ「やめて」と言うだけでなく，「そっちに行ってセーラームーンしてて」と何とかしてMの気をそらすための働きかけをしている。一方で，エピソード10では，同年齢である年長児，特にクラスでも力のあるRに対する自己主張状況であったため，Eは自己主張を控えたとも考えられる。

**まとめ**

本研究では，縦割り保育を行っている幼稚園の園児を対象に，日常的な個別活動，集団活動の場面でどのように自己調整的行動を示すかをエピソードで示し，年少児（3～4歳児），年中児（4～5歳児），年長児（5～6歳児）の各年齢における発達的特徴について考察を行った。

ここから導き出された，幼児期の各年齢における自己調整機能のうち，自己抑制的行動，自己主張的行動の発達的特徴を，欲求と規範の関係性という観点からまとめ，表3に示した。

まず年少児（3～4歳）を「欲求の衝動的表出」の時期とした。自己抑制に関しては，エピソード1に見られたように，そのときに置かれた状況にかかわりなく，突然自分の感情を爆発させたり，欲求のままにふるまうことがある。一方で，エピソード2に見られたように，外的な指示（○○しなさい，○○してはいけません）があるときはそれに従うことができることが多い。

一方，自己主張に関しては，エピソード3に見られたように，相手の働きかけを「いや」と拒否したり，自己の欲求を「○○したい」「○○したくない」と表出するような，比較的単純な形での自己主張が多く見られる時期である。これは，この時期にはまだ子どもの内面において規範（するべき状況）よりも欲求（したい行動）の方が優先されることが多いからであると考えられる。

次に，年中児（4～5歳）を「規範と欲求の葛藤」の時期であるとした。自己抑制に関しては，規範の内面化が進み，エピソード5に見られたように，自己抑制が難しい状況にも「してはいけない」という規範を強く意識し，その場の欲求を抑制することができるようになる。また自己主張に関しても，エピソード6に見られたように，「してはいけない」「しなければならない」という規範を持ち出して自分の欲求を主張する行動が見られる。

一方で，エピソード7に見られたように，過剰に欲求を抑えすぎて，反動で欲求を衝動的に表出してしまうこともある。これは，この時期の子どもは規範を欲求とおなじぐらい重視するようになるため，この2つが葛藤を起こすためであると考えられる。

表3. 各年齢における自己調整的行動の発達的特徴

| 自己抑制 | 段階 | 自己主張 |
|---|---|---|
| 自己抑制すべき局面が意識されにくくなる。仲間関係の維持など，長期的な展望に立った自己抑制が可能になる。 | 欲求と規範の融合（年長児） | 自分にとって価値が大きいものに対する自己主張がよく見られる。一方で，相手との関係性を考慮し，あえて自己主張を控える事もある。 |
| 規範への意識が強くなるが，一方で規範を意識するあまり過剰に自己抑制的になったり，結果として不満を爆発させてしまったりする。 | 欲求と規範の葛藤（年中児） | 自己主張の根拠として規範を持ち出すことが多くなる一方で，規範を過剰に意識し，自己主張に失敗することがある。 |
| ルーティンに沿わない状況や欲求と規範の隔たりが大きいときに，自己抑制が失敗しやすいが，外的指示に従った自己抑制が可能である。 | 欲求の衝動的表出（年少児） | 「したい」「したくない」という単純な表現での自己主張が多く，理由や根拠を述べることは少ない。 |

最後に，年長児（5～6歳児）を「欲求と規範の融合」の時期とした。この時期には多くの子どもが共通の規範に従って行動するようになり，自己抑制に関しては，エピソード8に見られたように，なぜ抑制，主張しなければならないのかという根拠を重視する。

自己主張に関しては，エピソード9に見られたように，自分の取り組んできた結果が阻害され

るような状況では，強く自己主張するものの，エピソード10のように，自分の欲求を押し通すよりも他者との協調を重んじ，相手と自分との関係性に応じて自己主張を控えたり，表現を変えたりする姿も見られる。これは，この時期には子どもの内面において，規範を欲求よりも重視するようになることと，規範的にふるまうことを好み，したいこととしなければならないことの間のずれが小さくなるためであると考えられる。

**展望**

最後に，本研究の問題点と今後の展望について述べる。

本研究では幼児の日常場面における自己調整機能の現れ方をエピソードとして記述することにより，実験的に統制された状況では現れにくい各年齢における発達的特徴を描き出すことができた。

その一方で，エピソードの収集や抽出の段階で著者の恣意性が反映された危険性がある。エピソードの収集の段階では，特に自己調整機能に限定はせず，目についた出来事をエピソードとして記録していたが，意識せずして著者の興味が反映された可能性は大いにある。さらに，エピソードの抽出の段階では，各年齢の発達的特徴がよくあらわれていると考えられるものを選んだが，これらがその年齢の多くの子どもの特徴を実際にあらわしているかに疑問が残る。そこで，今後の課題として，これらの発達的特徴の記述に客観性と信頼性を保証するために，すべての子どもについて一定の時間内のすべての行動を観察し，自己抑制の成功と失敗，自己主張の成功と失敗の4つのカテゴリーに分類されるエピソードが，どれぐらい現れるのかを分析する研究が必要であると考えられる。

## 謝　辞

本論文の執筆にあたり，ご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科教授 子安増生先生，また長期にわたる縦断的観察にご協力いただいた幼稚園の先生方および園児のみなさまに心よりお礼申し上げます。

## 文 献

Luria, A.R. (1961). *The role of speech in the regulation of normal and abnormal behavior.* In J. Tizard (Ed.). New York : Pergamon Press.

Luria, A.R. (1969). Speech development and the formation of mental process. In M. Cole & I.Maltzman(Eds). *A handbook of contemporary Soviet psychology* (pp.121-162). New York : Academic Press.

Mischel, H.N. & Mischel, W. (1983). The development of children's knowledge of self-control strategies. *Child Development,* **54**, 603-619.

柏木恵子. (1988). 幼児期における「自己」の発達－行動の自己制御機能を中心に－. 東京大学出版会.

Kopp, C.B. (1982). Antecedents of self-regulation : A developmental perspective. *Developmental Psychology,* **18**, 199-214.

鈴木亜由美 (2005a). 幼児の対人場面における自己調整機能の発達：実験課題と仮想課題を用いた自己抑制行動と自己主張行動の検討. 発達心理学研究, **16**, 193-202.

鈴木亜由美　(2005b).　幼児の自己主張行動の実験的検討―仮想課題と実験的観察を用いた2状況の比較―.
京都大学大学院教育学研究科紀要，**51**，74-85.

（教育認知心理学講座　博士後期課程3回生）

（受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日）

# Development of Self-regulative Behavior in Young Children Observed in Their Daily Life: Episode Analyses

SUZUKI Ayumi

This study describes self-regulative behaviors in young children, which are observed in their daily lives, and attempts to explain their developmental changes. Thirty-five 3 to 6-year-olds of the same class in a kindergarten were observed once a week for two years. Episodes about their self-regulative behaviors were classified into four categories; success of self-inhibition, failure of self-inhibition, success of self-assertion, and failure of self-assertion. One typical case was described and examined in each category at 3-4, 4-5, and 5-6 years of age. In conclusion, it is suggested that there are three phases in self-regulative behavior in young children. The first one is the impulse-centered phase, which is observed in 3 to 4-years-olds. The second is the conflict phase in which children's impulses and learned social rules conflict, and observed in 4 to 5-year-olds. The last one is the integration phase in which their impulses and rules are integrated, and observed in 5 to 6-year-olds.